

『ルース』と家庭のイデオロギー

東京家政学院筑波女子大学 波多野 葉子

産業革命は新興中産階級の台頭を促しただけでなく、彼らの職場と家庭の分離をもたらし、ジェントリー同化願望をもつ新興中産階級は、次々と住まいを田舎、または郊外に移し、都市の喧噪から逃れていった。産業革命以前は家内工業が中心で役割分担はあるものの、家族は男女を問わず、同じ仕事場、ないしは近くで協力して働いていたが、産業革命によって事業の規模が拡大し仕事場と住まいが分れ、妻や娘は生産現場から離れて住むことになっていったのである。そして、英国に伝統的な「住まいは田舎に」という考えと新興中産階級のジェントリー同化願望があいまって、新興中産階級の田園地帯への流出を促進していった。¹⁾ こうして新興中産階級は自らの繁栄と出世をもたらした生産現場から離れ、ジェントリーの生活様式を模倣しようとしたのだが、この現象は自らが創り出した工業化が、あまりにも広範で劇的な変化を社会機構のみならず、英国人の精神や価値観にも及ぼしたことへの反動ともいえる。つまり、「工業や商業活動から逃れたい」という願望が中産階級に芽生えたことも、田舎へ住居を移すことに拍車をかけたのである。こうして職住分離がすすみ、ヴィクトリア朝の理想の女性像を生み出すもととなった“separate spheres”という概念の物理的条件が整っていった。そして、男性の領域である都市の職場は“public sphere”として、また女性の領域である家庭は、“private sphere”として定義され、職住の物理的二分化は性別による分業体制を作り上げて行き、それが結果的に女性を生産現場から離脱させることとなっていった。²⁾

この“separate spheres”という概念が、「家庭の天使」を造り上げていく「家庭のイデオロギー」(domestic ideology)を形成していったことは、周知のことであり、ヴィクトリア朝には、この家庭のイデオロギーを様々な形で反映した作品がみられる。例えば、「家庭の天使」を描き中産階級の理想的女性像を擁護し

た作品がよくみられる一方で、天使を批判的に描き中産階級の“philistinism”を揶揄した作品が生み出されていった。³⁾ そうした中で、*Ruth* (『ルース』) は“a fallen woman”という題材を扱いながら、なんとか“a fallen woman”であるルースに「家庭の天使」の属性を付与しようとした Gaskell の意図が表れた作品である。つまり、この作品には、“a fallen woman”の更生の過程に家庭のイデオロギーの影響が窺えるばかりでなく、“a fallen woman”が更生し最後は死でその罪を贖う、という福音主義の影響が読み取れるプロットにも家庭のイデオロギーとの関連性を指摘することができるのである。本論は、以上の点を中心に、家庭のイデオロギーがどのように作品に反映されているかを検証することを目的とする。

I “private sphere”におけるルースの更生

『ルース』は余儀ない事情で罪を犯した“fallen women”の更生への理解を社会に訴えた作品であるが、ギャスケルはルースの更生の場に Benson 家を選んでいる。これは田園の“private sphere”は、過酷な商業世界である“public sphere”からの「避難所」であり、商業活動で受けた精神的な傷を癒し人間性を回復させる力がある、という家庭のイデオロギーが反映されたものである。とはいえ、ベンソン家のある Eccleston は工業都市であるので、一見この設定は田園の“private sphere”という定義からは逸脱し、ベンソン家を家庭のイデオロギーとは無縁のものとするように思われる。しかし、工業都市にあっても、ベンソン家の描写には、田園の住まいに通じる安らぎと自然が感じられる。北ウエイルズで Bellingham に捨てられ自殺を企てていたルースがベンソン氏に助けられ、北ウエイルズからエクレストンに着いて、初めてベンソン家の前に佇んだ時の静寂に満ちた通り、暖かい明りが隅々まで届く台所、スノードロップを連想させるルースのベッドと、そのスノードロップが咲く地面のような床、そしてなによりも、小さいながらも花が咲き誇る物音一つしない庭と、その豊かな香りが日の光と共に入ってくる室内は、まさに工業都市にありながら、その喧噪からは隔絶された平和と静けさに満ちた空間を作り出している――

That homely, pretty, old-fashioned little room! How bright and still

and clean it looked! The window . . . was open, to let in the sweet morning air, and streaming eastern sunshine. The long jessamine sprays, with their white-scented stars, forced themselves almost into the room. The little square garden beyond, with grey stone walls all round, was rich and mellow in its autumnal colouring. . . . It was so still, that the gossamer-webs, laden with dew, did not tremble or quiver in the least . . . and the parlour was scented with the odours of mignonette and stocks.⁴⁾

ベンソン氏は非国教会の牧師であり、当時非国教会は田園地帯ではなく都市部に勢力をもっていたので、ベンソン家が工業都市にあるという設定は自然なものと思われる。が、この描写から工業都市にあっても静寂と暖かさを備えた空間を造りだし、ベンソン家に田園の家にも似た特性を付与しようとしたギャスケルの意図が窺える。

このいわば“pastoral bliss”に満ちたベンソン家でルースの更生は始まるのであるが、これはギャスケルが“fallen women”の更生は、感化院ではなく“domestic sphere”でなされるべきであると考えていたことが反映されたものとみることができる。⁵⁾ ギャスケルのこの思想は当時福音派が中心になり推進していた“magdalenist”運動と軌を一にするものである。⁶⁾ この運動は、社会変化により生家が没落し、清純故に男にだまされ身を落した“respectable background”の女性を救済の主な対象にしていたが、そうした女性にはそれまでの刑務所のような更生施設ではなく“a new type of ‘family’ establishment structured on domestic lines” (Mason 91)が必要であるとされた。こうした考えには“domestic sphere”は、熾烈な競争原理の支配する“public sphere”で心身共に傷ついた男性の人間性や道徳心を回復させる場所である、という家庭のイデオロギーが反映されているといえよう。もし余儀ない事情で本来居るべき領域からはみ出してしまった“fallen angels”も資本主義社会の犠牲者なら、彼女達も“domestic sphere”に戻り、罪を贖い本来の純粋さを取り戻す機会を与えられるべきなのである。こうした考えがルースの更生場所であるベンソン家に田園の家庭の暖かさと平和を付与したことに反映されているといえよう。ギャスケルは、ルースのモデルと言われる Pasley の場合には、余儀なく移民という形をとったが、『ルース』

では、自分の信念に沿った形でルースの救済を訴えたものと思われる。そして無垢であると同時に無知でもあったルースは、ベンソン一家の愛と指導のなかで、自らの罪を深く恥じ、母親としても立派に成長するだけでなく、教養と品格を身に着けた素晴らしい女性に成長するのである——“But the strange change was in Ruth herself. . . . She delighted in the exercise of her intellectual powers, and liked the idea of the infinite amount of which she was ignorant; for it was a grand pleasure to learn . . .” (191). ルースのこの変化はベンソン氏の “In the eye of God, she is exactly the same as if the life she has led had left no trace behind” (119) という言葉に集約されるが、それは “souls may be spiritually improved by a change in social condition” (Mason 81) という福音主義が持つ改心や魂の救済の可能性への信頼と共通するものであった。この後ルースはさらにベンソン家という聖域から足を一歩踏み出し、町の実力者の Bradshaw 家の家庭教師としての役割を立派にこなし、ブラッドショウ氏からさえも一目置かれるような存在になる。

こうしてルースの更生に役割を果たした家庭のイデオロギーであるが、皮肉なことにルースは家庭のイデオロギーの故にブラッドショウ家から追放されることになる。ヴィクトリア朝の中産階級にとって家庭は理想の女性が住む場所であった。彼らは家庭を聖化し、暖炉は祭壇になぞらえられ、女性はそれを司るものとされていた。そうした聖なる場所を、更生したとはいえ罪を犯したルースが汚すことは許されないことであった。実際ブラッドショウ家から家庭教師の話があった時、ベンソン氏は姉とルースをブラッドショウ家で働かせることの是非について論議する。その結果、ベンソン氏は

“I do not see any danger that can arise . . . I have watched Ruth, and I believe she is pure and truthful; and the very sorrow and penitence she has felt — the very suffering she has gone through — has given her a thoughtful conscientiousness beyond her age.” (199)

と姉を説得したのであった。従って、自分の聖なる城を汚され、ルースと Leonard による子供たちへの悪影響を心配したブラッドショウ氏の怒りは当時の状況から

すれば理解できることである。信頼していたベンソン氏に裏切られたという思いと重なり、ベンソン氏の “to every woman, who, like Ruth has sinned, should be given a chance of self-redemption . . . in the spirit of the holy Christ” (351) とルースを弁護する言葉もブラッドショウ氏の耳には入らない。ブラッドショウ氏は当時の中産階級の硬い道徳心を具現したかのような人物であるが、彼の怒りと驚きは、同時の中産階級の “fallen women” に対する反応としてはそう異常なものではないであろう。ここで “fallen women” のみを非難し、彼女達を墮落させてしまった、主に彼女達より上の階層に属していた男達はとがめない社会の “double standard” はもとより、“fallen women” の更生を説きながら、いざ自分の生活に彼女達が入ってくると拒絶する中産階級の偽善性が糾弾されていることは明かである。⁷⁾ しかし、罪を犯したルースも未亡人として偽名の下に世間を欺き続けることは許されることではなかった。ルースもまた仮面を取りさって、本当の自分を出し、神の許しを請わなければならなかったのである。結局、『ルース』は、性的自由を訴えているのではなく、罪を犯したが更生しようとしている女性に社会が同情と理解を示してくれることを訴えているのである。従って、過去を暴かれブラッドショウ家から追放されたルースは、ベンソン家を拠点にしてはいるが公の場に出て、看護婦として働くことになる。

II “public sphere” におけるルースの罪の贖い

ナイチンゲールが看護の質と看護婦の地位を高めるまでは、看護婦は労働者階級の者だけが耐えられる卑しい仕事とみなされ、個人の家で雇われた場合でも、使用人のなかでも格が低い皿洗いと同じ扱いを受けていた。⁸⁾ 更に看護婦には不道徳、無知、怠惰、放蕩、飲酒等の悪いイメージがつきまとい、Poovey が述べるように、実際に患者の体の世話をすることから看護は “sexuality” との関連性まで示唆していた。⁹⁾ 従って、Jemima が “You, a sick nurse! . . . My dear Ruth, I don't think you are fitted for it!” (388) と驚きをあらわにしたように、ラテン語まで学び、豊かな感性と教養を身につけたルースには看護婦は全く不向きな職業であった。ルースは自分には “the gift of a very delicate touch, which is such a comfort in many cases” (388) があるので看護婦に向いているし、患

者もがさつな人より優しい人に看護されたいでしょう、と述べるが、彼女が看護婦になることは、自分と社会の両者から求められている償いの意味合いが強いことは否めない。それは彼女の仕事が初めは最下層の者のみを対象にしていたことから窺えるが、実際、看護には宗教的犠牲の意味合いがあったのである。

しかしルースはそれまでの看護婦とは全く異なる献身的な看護をし、“balmy effect” (391) を醸し出し、哀れな患者達は彼女の洗練された行動、声、仕草に満足し、心と痛みが和らぐのを覚える。こうした彼女の看護の評判は広まり、徐々に裕福な家庭からも仕事の声がかかるようになるが、重要なことは、人々がルースは神の見えざる御旗のもとに働いていると気付きだしたことである。本人は自分は相変わらず罪深きものと思っているが、こうした罪の償いが、“nursing angel”として社会に認められ社会復帰する足掛りとなっていき、家庭の天使の領域を“public sphere”にまで広げていくのである。

ルースが“nursing angel”となれたことは、有償の看護とは異なり、無償の看護は神聖な行為とされていたことと無関係ではない。特に個人的に看護することは Bailin によれば、“one of the primary duties and supposedly instinctive capacities of the angel in the house” (11) と考えられていた。さらに Summers は、富める者と貧しい者の溝を埋めるため、“to offer society the benefits of the domestic model” は、女性の役割であったと述べている。¹⁰⁾ この考えは、領地や教区の貧民や病人を見舞う、という支配階級の伝統的な務めとあいまって、中産階級の女性が、公の場で看護をする動機となっていった。Bailin はこの家庭の規範を“public sphere”に拡大していく考えが家庭のイデオロギーに沿ったものであると次のように述べている――

The nurse's duties outside the home corresponded to the male middle-class ideal of public service and yet could be seen as an extension of a woman's household tasks. The nurse embodies feminine ideals of compassion and self-abnegation, “doing” for others at the expense of her own vital powers. . . . (28)

ルースの看護は、有償であったとはいえ、明かにこの無報酬の看護のもつ天使

のような属性と同じ質を備えていた。彼女の“positive cheerfulness” (418) と一緒になった“art of diffusing peace”は家庭の天使に要求される特質であった。実際ギヤスケルはルースのイメージを有償の看護婦から切り離そうとしている。

Whatever remuneration was offered to her, she took it simply and without comment: for she felt that it was not hers to refuse; that it was, in fact, owing to the Bensons for her and her child's subsistence. She went wherever her services were first called for. . . . From the happy and prosperous in all but health, she would occasionally beg off, when some one less happy and more friendless wished for her; and sometimes she would ask for a little money from Mr Benson to give to such in their time of need. But it was astonishing how much she was able to do without money. (391)

こうしたギヤスケルの試みは更に続き、ルースはチフスの患者で満ちた病院の看護婦として志願する。ここで、看護の場が個人の家から、完全に公の場となり、自己犠牲にも似た彼女の看護は、罪の贖いではなく、純粋に神への愛の為にあるのだと人々が認識していく。ルースは過去に犯した罪の償いのために看護をしているのだ、と言った人に、娘を献身的に看病してもらった老人は次のように述べる—“Such a one as her has never been a great sinner; nor does she do her work as a penance, but for the love of God, and of the blessed Jesus. She will be in the light of God's countenance when you and I will be standing afar off” (429). この弁護は、それを聞いていたレオナードに母への愛と誇りをもたせるが、ルースの罪の表象ともいえる彼に認められたことは、神の許しが得られたことを示唆する。そして、人々はルースのお蔭で町の恐ろしい恐怖が治まったことを感じ、レオナードに会うと立ち上がって、彼女を“blessed” (430) と讃えるのだった。こうして完全な公の場所、しかもどんなに高い報酬をもってしても看病する者のいなくなった病院で、務めを立派に果たしたルースは、報酬を受けることを相殺し、“saving angel”、さらには“savior of community”の役割を果たし、どの家庭の天使より天使の役割を全うしたのである。

ルースの持つ天使のイメージは、自分を誘惑したベリンガムの看護をすることで、さらに強くなる。彼ならいくらでもロンドンから第一級の看護婦を連れてこられるからと、彼の看護を思い留ませようとする Davis 医師に、ルースは述べる——“I don't think I should love him, if he were well and happy — but you said he was ill — and alone — how can I help caring for him?” (441) マグダラのマリアのように罪を犯したルースは、今まさに神の御言葉を実践する“saving angel”となったのである。

Ⅲ ルースの死

しかし、ルースは家庭のイデオロギーが擁護する女性らしさに沿うために、死ななければならなかった。Davidoff と Hall によると、家庭のイデオロギーは“delicate, shrinking femininity”を“as the only beauty expressing full virtue”としていたので、“strong, large women depart from both moral and physical standards”であった。¹¹⁾ 実際、理想の女性は、賢く、商業世界で傷ついた夫の傷を癒し、平和を与える存在であったが、同時に強いオークにからまる蔦であり、男性の権威と覇権を脅かさないことが求められていた。従って、男性の医師さえもが罹患して亡くなった伝染病に移らなかつたルースの強靱さは、理想の女性像と相入れないばかりか、男性の領域に踏み込んだことをも示唆していた。当然、ルースが無事に病院での務めを終えた時、読者は彼女を女性の徳を具現するには、鈍感なほど丈夫だと思った可能性がある。Charlotte Brontë 作 *Shirley* の Caroline Helstone や Anthony Trollope の *The Small House at Allington* の Lily Dale が病気になることによって、自らの女性らしさを映し出したように、ルースも病気になる必要があつたのである。¹²⁾ またルースの強さは、父は“respectable farmer”で、母は国教会の牧師補の娘という生まれにもそぐわない。とするとベリンガムの看病による死は、彼女の天使のように純粋なイメージを保つばかりでなく、家庭のイデオロギーの求める女性らしさに合わせるためには、必要なことだったと言えよう。

この虚弱さと女性の徳との関連には、病弱さを高貴な精神と結び付ける“Evangelical idealization of morbidity” (Bailin 10) の影響がある。つまり、

チフスが蔓延し、医師までもが死に至った病院で看護をしても罹患をしないルースでは、道徳的に問題がある女性という意味合いさえはらんでしまうのである。福音主義が家庭のイデオロギーの形成に強い影響を与えたことを考えると、この福音主義に根ざした考えが本作品に反映されていたとしても不思議はない。¹³⁾ つまり femininity = fragility = spiritual eminence という図式は納得のいくものであろう。

しかし、それでもルースは死ぬ必要があったのであろうか、病気になるだけで充分であったのではないだろうか、という疑問が生じる。重い病気で死線をさまよったことで、か弱いことは充分証明できるからである。しかし、Bailin が述べるように、ヴィクトリア朝の小説には、病室外で結ばれなかった男女が、看護婦と患者の関係になると将来結ばれることがよくあった。とすると、ルースが回復するとベリンガムと結ばれる、という結末が予測でき、それでは悲劇にならず、無知と純粋さと不幸な境遇の故に罪を犯した女性達を救う、というギャスケルが本作品を書くにいたった意図が伝わらない。なによりもまた、患者と看護婦の愛は、患者の体に触れることに起因する看護の持つ性的要素を示唆して、ルースの崇高な看護と贖罪が不純なものになり、さらには理想の女性像にそったルースの天使のような要素までもが損なわれてしまう危険性がある。従って、ルースの死には必然性があったのである。

このように『ルース』には家庭のイデオロギーが色濃く反映されている。ルースの更生には、田園の家庭には傷ついた人間の精神を回復させる力があるという考えと、家庭は清らかな「天使」が住む場所である、という考えが影響を与えているし、ルースの死は家庭のイデオロギーの求める理想の女性像、さらにその形成に一役かった福音主義の影響が見てとれるのである。思えば『ルース』は福音派が主導した“magdalenist”運動の趣旨を文学で実践したかのような作品であるので、福音主義の影響の濃い家庭のイデオロギーが反映されているのは自然なことであらう。

注

本稿は日本ギャスケル協会第8回大会(1996年10月27日)の研究発表の原稿に加筆したものである。

- 1) 新興中産階級は自らの富と繁栄をもたらした生産現場を捨てたばかりでなく、息子はオックスブリッジに進ませ紳士として教育し、娘は没落しかけた旧家に嫁がせ、労働者階級の出自を隠すことに躍起になっていた。新興中産階級のジェントリー同化願望については、Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1980* (Harmondsworth: Penguin, 1981) 11-24 に詳しい。
- 2) Joan N. Burstyn はこの分業体制の新しい点は、“the establishment of an ideal that removed women from all productive labour but childbearing” と述べている。 *Victorian Education and the Ideal of Womanhood* (London: Croom Helm, 1980) 19 参照。
- 3) 例えば、*David Copperfield* の Agnes Wickfield は完璧な天使であり、Dickens が中産階級の理想的女性像を擁護していたことが伺える。一方で *Vanity Fair* の Amelia Sedley には Thackeray の天使に対する批判が伺える。
- 4) Elizabeth Gaskell, *Ruth* (1853, Oxford: Oxford Univ. Press, 1981) 140. 本作品からの引用は全てこの版による。
- 5) Elsie B. Michie, *Outside the Pale: Cultural Exclusion, Gender, Difference, and the Victorian Woman Writer* (Ithaca: Cornell UP, 1993) 81.
- 6) Michael Mason, *The Making of Victorian Sexual Attitudes* (Oxford: Oxford UP, 1994) 81. マグダレニスト運動は福音派が主導していたが、他の宗派のみならず世俗の団体をも巻き込む広範な運動であった。
- 7) 当時の中流の男女には、両親の生活水準が維持できる経済力ができるまで結婚しない傾向があったので、男性の性的欲求の捌け口としての売春婦の存在価値は大きかった。また労働者階級の女性の墮落には上中産階級の男性の誘惑が起因することも多かった。詳細は Judith R. Walkowitz, *Prostitution and Victorian Society: Women, Class and the State* (Cambridge: Cambridge UP, 1980) 32-47.
- 8) Mariam Bailin, *The Sickroom in Victorian Fiction: The Art of Being Ill* (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 31.
- 9) Mary Poovey, *Uneven Developments* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1988) 174.
- 10) Anne Summers, “Ministering Angels: Victorian Ladies and Nursing Reform,” *Victorian Values*, ed., Gardon Marsden (London: Longman, 1990) 125.
- 11) Leonore Davidoff and Catherine Hall, *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1987) 149.
- 12) Caroline の病と女性らしさの関係については、Athena Vrettos, *Somatic Fictions*

(Stanford: Stanford UP, 1995) 39 に詳しい。Vrettos はさらに病と感性の関係にも触れ、“The fictive connection between illness and sensibility was thus well established by the time Brontë began writing *Villette*; indeed, it was a familiar literary trope that had happened to the level of parody and cliché” (59) と述べている。

13) 福音主義と家庭のイデオロギーの関連については Davidoff and Hall, pp.147-192 に詳しい。